

## 「この人は神の子だった」

2014年12月09日

マルコによる福音書 15章 39節～41節。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。この婦人たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。

主イエスは、午後3時に大声をあげて、息を引き取られた。十字架刑は数日間、苦しみ抜いて死ぬ残酷な刑である。ところが、主イエスの場合、午前9時につけられ、午後3時に亡くなっている。極めて短い時間であった。ろばの子に乗ってエルサレムに入城した日から神殿当局と激論を交わし、大祭司の庭で真夜中の人格無視の「降格儀式」を甘受し、ピラトの尋問を受け、侮辱の中で、激しい拷問を受け続けた。ゴルゴタの刑場までの十字架も背負えない状態であった。体力が消耗し切って、死までの時間を短くしたのであろう。

主イエスのこの十字架刑の全てをローマ軍の百人隊長が見守っていた。彼は刑執行の責任者ではなかったか。彼は主イエスが息を引き取るのを見て「本当に、この人は神の子だった」と言った。彼は、十字架刑だけでなく、刑の執行前の主イエスを取り巻く状況も知っていただろう。神殿当局が主イエスを無(亡)き者にしようとの思惑を計略通りに実行したことを察知していた。そして、ピラトの尋問に立ち会い、鞭打ち、同僚たちと拷問にも加わった。「十字架につける」と付和雷同する群衆の声を聞いていた。ゴルゴタまでの苦悩の「市中引き回し」を指図し、同行していた。そして、苦しみの絶頂で息を引き取る最期までの一部始終を目の前で見ている。

主イエスは黙々として、侮辱と苦しみと激痛に耐え、信じられない平安をもって毅然としておられた。百人隊長は戦争の最前線に立って指揮する兵士で、今まで多くの死者を見てきた。しかし、主イエスのように死を受け入れる人を見たことがない。彼は、自らの手を汚さない最高法院の卑劣さ、正義に背を向けたピラトの優柔不断な無責任さ、周りに迎合する群衆の日和見な声、愛しながらも裏切って姿を現さない弟子たちの利己主義、それら一切の罪を背負って十字架で死にゆく主イエスに神の子の姿を、言い知れぬ感動をもって見た。彼は思わず「本当に、この人は神の子だった」と告白したのである。

辺見庸氏はソマリアで出会った14歳の難民の少女について書いている。少女は身動きできないほど衰弱していたが、澄んだ聖なる目をして、死に呼び込まれつつあった。辺見氏は、少女の姿にこの世の苦しみを、他人の分まで全て一身に負い、苦界の衆生を済度する美しい観世音菩薩を見て合掌したという。そして、誰にも知られず、墓も墓標もなく死のうとしている少女に世界の中心があると確信したと書いている。辺見氏は、少女に人間の罪を負う贖罪を見たのである。この視点は、百人隊長と通底している。世の中には理不尽に殺される悲惨がある。それらの死は人間の罪を負った贖罪的な死の意味を持っている。

クリスチャンは主イエスの十字架の死に私の罪の贖いを信じる者である。百人隊長と同じく「本当に、この人は神の子だった」と告白する者になることである。

ガリラヤから主イエスに従い、奉仕を続けてきた女性たちは、主イエスの最期の姿を見守っていた。彼女たちが最初の復活証言者となる。